

# 鯨 研 通 信



第241号

2004年3月

財団法人 日本鯨類研究所 〒104-0055 東京都中央区豊海町 4番5号 豊海振興ビル5F 電話 03 (3536) 6521 (代表)  
 HOMEPAGE <http://www.icrwhale.org>

## 目次

理事長就任に当たって .....	畑中 寛 1
鯨類の資源管理における系群構造の定義に対する	
IWC科学委員会の二重基準 .....	ルイス・A・パステネ 4
日本鯨類研究所関連トピックス (2003年12月~2004年2月).....	11
日本鯨類研究所関連出版物等 (2003年12月~2004年2月).....	12
京きな魚 (編集後記) .....	14
スタンディングレコード (2003年12月~2004年2月受付).....	15

## 理事長就任に当たって

畑中 寛 (日本鯨類研究所)

本年1月12日付で独立行政法人水産総合研究センター理事長を辞職し、1月28日の財団法人日本鯨類研究所理事会で当研究所理事長に選任されました。水産庁水産研究所からその後の(独)水研センターまで39年余を水研で過ごしましたが、よき先輩、同僚、後輩に恵まれ、大変幸せな研究生活を送らせていただきました。

水産研究所では、遠洋水産研究所での勤務が長く、30年余になります。漁業資源の生物学的研究、資源評価などに従事してきましたが、対象生物種としては、遠洋漁場におけるいかやたこなどの頭足類と底魚類でした。昭和63年からは管理職の仕事に移り、研究現場からは遠くなりましたが、平成5年の国際捕鯨委員会(IWC)京都会議から鯨類資源の研究に関わることにな



りました。当時我が国のIWC政府代表(コミッショナー)を努めておられた島一雄様の指示によるものでした。遠洋水研所長であった大隅清治氏が日鯨研に移られIWC科学委員会に関わる鯨類研究者の束ねをするシニアサイエンティストを務める者がいなかったために、当時遠洋水研企画連絡室長であった私にそのお鉢が回っ

てきたことでした。当時日鯨研理事長であった長崎福三氏と大隅専務、山村参事などの方々のご推薦もあったと聞いております。以来現在まで水研センターの管理職としての仕事のかたわら、鯨類の調査研究に関わり、研究者としての楽しさ、苦しさも味わいながらこの11年間を過ごしました。鯨の仕事がある意味でストレスの解消に役立っております。

魚やいか、たこの研究者が鯨類の研究に転向する例は珍しく、よく思い切って変わりましたねといわれますが、初代の日鯨研理事長を務められた池田さんは研究室長として10年以上もご指導を受け、前理事長の大隅さんには数年間部下として仕えたこともあり、あまり違和感はありませんでした。今では私の専門は鯨類資源ですと言っております。

私が鯨の研究に関わることになった平成5年のIWC京都会議では、IWC科学委員会が北西太平洋ミンククジラへの改訂管理方式(RMP)の当てはめ作業を開始したところでした。RMPというのは、資源を枯渇させることなく安全に捕鯨を行うための捕獲枠を計算する仕組みですが、特に複数の系群が入り交じっているような場合においても全ての系群にとって安全な捕り方をするために、系群構造が複雑であればあるほど捕獲頭数が少なく算出されます。我が国沿岸のミンククジラへのRMPの当てはめでは、当初きわめて複雑な3系群と7亜系群が存在するといった系群構造が設定されました。このような条件の下では、捕獲枠を算出してもゼロとか数頭程度にしかありません。日本の研究者によるこれまでの研究では、太平洋系群と日本海系群の二つとされてきました。しかし、他の系群や亜系群がないとするにはデータが不十分であるとされてしまいました。

この状況から抜け出すため、日本政府は捕鯨調査を実施することとし、その捕鯨調査計画を立案するという仕事が私に課せられました。私が出した原案は、系群についての十分な知見を得るために「ミンククジラの系群構造の解明」を目的としたものでしたが、大隅前理事長をはじめとする日鯨研の研究者、遠洋水研の研究者、そして水産庁遠洋課捕鯨班の方々などとブラッ

シュアアップに努め、日本政府はこの計画を平成6年のIWC年次会合に提出しました。そして平成6年夏から日鯨研によってこの調査が開始されました。ミンククジラ100頭の捕獲から始まったこの調査は、平成11年にその目的を達して終了し、翌年から「鯨類と漁業との競合関係の解明」を目指した第2期の調査がスタートしました。調査内容は拡充強化され、ミンククジラ150頭、ニタリクジラ50頭、イワシクジラ50頭、マッコウクジラ10頭の捕獲調査が行われています。

日本鯨類研究所は昭和62年に設立され、南極海におけるミンククジラの捕獲調査を継続して実施しておりますが、この17年余の中で、前述した北西太平洋の捕獲調査を開始し、調査内容の充実、対象鯨種の拡大等、めざましい発展を遂げました。もとより、歴代のコミッショナー、行政の方々の適切なお指導と、大隅前理事長をはじめとする日本鯨類研究所の職員の皆様のご努力と共同船舶株式会社の全面的なご協力によるものですが、私もその末席に連なることができましたことは大変うれしく、また心から感謝しているところです。

この度、日本鯨類研究所の理事長に選任されましたが、大隅前理事長をはじめとする職員の皆様が歩んでこられたこれまでの路線を継承し、事業の充実強化に努めたいと考えております。具体的には、

#### 1. 捕獲調査事業の充実

北西太平洋の捕獲調査では、鯨類と我が国沿岸・沖合漁業との競合を解明し、双方を含めた一括管理への道筋を探るという目標に向けての前進をはかるとともに、本年のIWC会合で予定されている過去2カ年の結果を基にした沿岸ミンクの捕獲頭数やイワシクジラの捕獲頭数の見直しを行わねばなりません。

南極海においては、昭和62年から開始された18年間にわたるミンククジラの長期調査が来年で終了します。生物学的特性値の推定をはじめとする目的に沿って成果を取りまとめ、第2期調査に向けた新調査計画の検討に入らなければなりません。

#### 2. 国会および日本政府による政治的、外向的

### 努力への協力

自民党国際捕鯨委員会（IWC）対応検討プロジェクトチームの中間報告が本年1月に出されました。超多忙の国会議員の方々が多く時間をかけて議論をされたことは特筆に値することと思われまふ。我が国の方向を定める上での影響やIWCへの波及効果が期待されまふ。そして、この中間報告では「捕鯨再開と持続的利用への支持拡大へ向けて捕獲調査の充実強化」が明記されました。日鯨研としても、捕獲調査の実施主体としてよりいっそうの努力を傾注することとなります。

### 3. 伝統的な捕鯨地域文化、食文化の維持、継承のための取り組み

日鯨研には情報・文化部があり、この問題に取り組み、またこの問題に取り組んでいる方々をいろいろな形で支援しています。日本人としてのアイデンティティーに関わるこの問題は大変重要であり、充実強化が望まれます。私はこれまでこの問題に関わったことはありませんでしたが、これから十分に学んでゆきたいと考えています。

さらに、私の理事長選任と時を同じくして、創立以来日鯨研の運営に努めてこられた山村和夫氏が共同船舶株式会社の社長に就任されました。日鯨研と共同船舶は調査の実施者と調査船の運航者であり、車の両輪の関係にあります。これまでも両者は密接な関係を維持してきましたが、ますます連携を強めることができると思っています。

今、私は理事長として一月あまりを過ごしたところですが、日々新鮮な驚きにつつまれています。一つの例を挙げますと、商業捕鯨と持続的捕鯨の違いを改めて認識しました。現在、捕鯨関係者もまた企業もかつてのような営利を追求する商業捕鯨の復活を意図するものではなく、むしろ捕獲調査に近い、資源動向を着実に把握しながら捕獲し、鯨体の全てを無駄なく利用するという捕鯨をイメージしています。畜肉

生産のような地球環境の悪化を伴わずに良質な動物タンパク質を供給することを目的とし、必要なコストを差し引いた残りの肉やお金を食糧不足の国々や発展途上国に提供するものです。これがいわゆる持続的捕鯨の概念であると理解しました。

また、最近この日鯨研から発信された鯨類の捕食量が人間による漁獲量の5倍程度に達するというメッセージは世界の人々に浸透しつつあります。生態系の最高位にある海産哺乳類を抜きにしては海洋生物資源の持続的利用は成立すべくもありません。このメッセージは21世紀における人類に対する重要な警鐘となるでしょう。

私は、関係の皆様のご配慮でこのようにすばらしい日本鯨類研究所で仕事をすることになり心から感謝しております。そして、これからいろいろなことを学びつつ日本鯨類研究所の発展と持続的捕鯨へ向けて前進できるよう努力する所存です。皆様のご指導、ご鞭撻を切にお願いし、理事長就任のご挨拶といたします。

### 畑中新理事長 略歴

- 昭和40年 3月 北海道大学水産学部卒業
- 昭和40年 4月 水産庁東海区水産研究所入所
- 昭和57年11月 水産庁遠洋水産研究所底魚海獣資源部遠洋トロール資源研究室長
- 平成 2年 4月 水産庁遠洋水産研究所外洋資源部長
- 平成 6年 3月 水産庁遠洋水産研究所所長
- 平成 9年 3月 水産庁西海区水産研究所所長
- 平成10年10月 水産庁中央水産研究所所長
- 平成13年 4月 独立行政法人水産総合研究センター理事長
- 平成16年 1月 独立行政法人水産総合研究センター理事長退任
- 平成16年 1月 財団法人日本鯨類研究所理事長

# 鯨類の資源管理における系群構造の定義に対する IWC科学委員会の二重基準

ルイス・A・パステネ（日本鯨類研究所）

## 1. はじめに

いくつかの大型鯨類の種と系群が先住民生存捕鯨および商業捕鯨の対象として利用されてきた。その中にホッキョククジラ (*Balaena mysticetus*) の北極西部系群（一般にベーリング-チュクチ-ビューフォート (B-C-B) 系群と呼ばれる) と北西太平洋ミンククジラ (*Balaenoptera acutorostrata*) がある。IWC科学委員会 (SC) では、これらの資源管理のために、前者では先住民生存捕鯨管理方式 (AWMP) を、後者では改訂管理方式 (RMP) を開発し、その適用作業をすすめている。

これらの管理方式を運用する上で、重要なのは系群構造の情報であり、これまでSCでも多くの時間を費やして検討されてきた。

SCはホッキョククジラB-C-B系群について十分なデータや議論もないままに単一系群であるとのシナリオを採用したが、北西太平洋ミンククジラでは、RMPの適用試験作業 (ISTs) が開始されてから10年以上経ってもまだ系群を定義することができず、長い議論が費やされている。北西太平洋ミンククジラの系群構造解明を主目的の一つとしたJARPN (北西太平洋鯨類捕獲調査) から多くの情報が提供されたが、最適な系群構造シナリオは定義できず、ISTsの最終段階になってようやく4つの系群シナリオを採用した。しかしながら、このシナリオの中にも、信頼できない解析手法と仮定のもとに立てられた仮説が含まれているにもかかわらず、全てに対して同様に高い妥当性があると結論している (IWC, 2004)。

本報では、SCにおけるホッキョククジラと北西太平洋ミンククジラの系群定義の議論をレビューし、SCが出した結論、すなわちホッキョククジラB-C-B系群では単一系群が採用さ

れ、北西太平洋ミンククジラでは単一系群が棄却されるに至った「系群の基準」について検討した。

## 2. ホッキョククジラ

資源管理のために、地理的に分離した集団として現在5系群 (スピッツベルゲン系群、デービス海峡系群、ハドソン湾系群、オホーツク海系群、及びベーリング海-チュクチ海-ビューフォート海 (B-C-B) 系群) が認められている (図1)。これらは過去の捕獲記録を基に決められたものである。B-C-B系群以外は資源量がとても低く、スピッツベルゲン系群では約数十頭、デービス海峡系群では約350頭、ハドソン湾系群では約100頭弱、そして、オホーツク海系群では約300 - 400頭と推定されている。

2002年のSC会議において、先住民生存捕鯨の対象となるB-C-B系群は9,860頭と推定された。この値は、東に回遊するホッキョククジラ



図1 現在、IWCで認められているホッキョククジラの5系群 (IWC, 1992aを改変)。

のパロウ岬からの目視調査に基づいたものである。

## 2.1 B-C-B系群

### 2.1.1 分布と回遊

この系群は冬期（9月 - 4月）にはベーリング海の中部と西部に広く分布している。4月から6月にかけては、チュクチ海の開氷とともに北上し、パロウ岬を越え、ビューフォート海南東部に向けて回遊していく（図2）。夏期（6月から9月）はビューフォート海一帯に分布し、秋（9月初旬から10月中旬）にはビューフォート海を離れて西へ向かう。9月中旬から10月中旬にかけては、北緯72度を北限にしてチュクチ海北東部で目視することができる。パロウ岬からチュクチ海に回遊してきたホッキョククジラはさらにウランゲル島に向かい、シベリア沿岸付近まで到達すると、沿岸に沿ってベーリング海まで南東にむかう。

また、これら以外に、春または夏になってもビューフォート海に向けて東方に回遊せず、チュクチ海に留まる集団のいることが知られており、秋季にチュクチ半島に沿って南西方向に回遊している集団のいることが、目視調査において観察されている。

### 2.1.2 先住民生存捕鯨

図2に示したように、ベーリング海に位置するキャンベル、サブーンガ、ウェールズ、チュクチ海のキバリナ、ポイントホープ、ウェインライト、パロウおよびビューフォート海のヌクサット、カクトビクの各村において、主に春季に回遊してくるホッキョククジラが先住民捕鯨の対象となって捕獲されている。1973年から1998年にかけて捕獲されたクジラの65%は、パロウとカクトビク村に集中していた（DeMaster *et al.*, 2000）。

### 2.1.3 系群構造に関する議論

ホッキョククジラの系群構造に関する最初の主要な議論は1991年のSCで行われた（IWC, 1992a）。特にB-C-B系群の定義に対する議論では、過去の捕獲データと目視記録が主に用いら

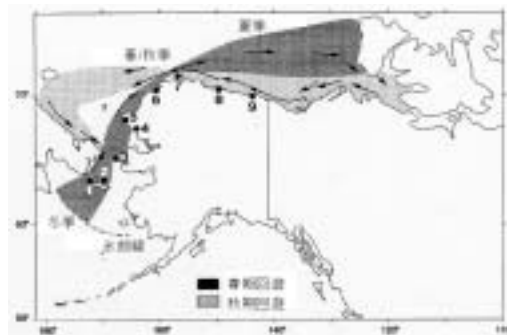


図2 . ホッキョククジラB-C-B系群の季節ごとの分布と回遊経路の概要。図中の数字は先住民生存捕鯨が行われている村の位置を示す。1 = キャンベル(ローレンス島, ベーリング海), 2 = サブーンガ(ローレンス島, ベーリング海), 3 = ウェールズ(ベーリング海), 4 = キバリナ(チュクチ海), 5 = ポイントホープ(チュクチ海), 6 = ウェインライト(チュクチ海), 7 = パロウ(チュクチ海), 8 = ヌクサット(ビューフォート海), 9 = カクトビク(ビューフォート海) (Moore and Reeves, 1993を改変)。

れた。

さらに、1994年にはB-C-B系群の定義について若干の議論が行われたが、成熟個体のほうが未成熟個体よりも広く分布していることや年齢および性によって棲み分けが起きていることなどの証拠が示されたにもかかわらず、氷の状態や餌の分布に伴って回遊を行っている単一系群らしいとSCは結論した。これを示唆する唯一の情報は、衛星標識の記録であり、一頭体であるが、カナダのビューフォート海からベーリング海まで34日間で移動したことが報告されている。

1998年のホッキョククジラの資源評価では、SCは海岸からの目視観察データに基づき、1994 - 1996年のチュクチ半島に隣接した海域に分布するホッキョククジラの季節分布と回遊を検討し、ホッキョククジラはベーリング海のアジア側沿岸の岬や風下にあたる浜の水海付近で冬を過ごし、春には何らかのクジラはアナディ

ール湾で留まること、チュコトカ半島東岸に沿った北部への移動はアラスカ北西部での移動よりもずっと遅れておこることなどが報告されている。

また、同会合では、ホッキョククジラにおける最初の遺伝解析の結果についても議論されたが、B-C-B系群の分布範囲内での異なる地域間での比較については焦点が当てられず、むしろ、この系群がボトルネックを受けていないかが問題となった。この解析には、パロウ岬からの93個体とセントローレンス島周辺の6個体のミトコンドリアDNA (mtDNA) 制御領域の塩基配列が用いられた。主な結果は、B-C-B系群がボトルネックの影響を受けていないことと、資源の枯渇にもかかわらず比較的高い遺伝的多様性を保持していたことであった。DeMaster *et al.* (2000) はパロウ岬からの93個体とセントローレンス島からの6個体は、mtDNA組成では統計的に違いはなかったが、後者の標本数が小さいので、明確な結論を導くことはできないと報告している。

さらに、1999年のSCでは、パロウ岬からの120個体とセントローレンス島からの6個体を用いたマイクロサテライト解析に基づくB-C-B系群に関する新しい遺伝解析結果が報告されたが、mtDNAの結果と同様であった。

2000年のSCの系群定義作業部会において、ホッキョククジラの系群構造に関する研究のレビューが行われた。DeMaster *et al.* (2000) によって報告されたレビュー論文では、B-C-B系群を含むホッキョククジラの系群構造に関する研究は遺伝関係でも殆ど無く、また遺伝以外の研究は皆無であると述べている。しかしながら、この会合においてSCは、B-C-B系群の中に北上回遊後にチュクチ海とビューフォート海とに分かれる亜系群があったとしても、回遊全期間にわたって時空間的に捕獲が行われるために、亜系群が枯渇する危険性はほとんどないとして、B-C-B系群を単一系群とする考え方に合意した (IWC, 2001a)。

SCは2002年にもホッキョククジラのB-C-B系群については、利用可能な系群データが限られ、また解析も限られているにもかかわらず、資源

管理のためにB-C-B単一系群シナリオを再び勧告し、AWMPではこのシナリオのもとに作業が進められている。

### 3 . 北西太平洋ミンククジラ

北西太平洋ミンククジラの系群構造に関する研究は、1950年代に日本周辺における沿岸小型捕鯨による捕獲の分布や体長、受胎日といった生物学的データに基づいて開始されている。IWCでは、日本周辺海域に3つの系群 (日本海-黄海-東シナ海 (J系群)、オホーツク海-西太平洋 (O系群) およびその他) を定義し、これらの系群の管理のための境界をSCの勧告に基づいて定めている (IWC, 1983 ; 図3)。北太平洋ミンククジラにおける系群構造の研究についてはPastene *et al.* (2000) によってレビューされている。

将来、RMPの下で商業捕鯨の対象となりうるO系群の資源量は、IWCによって25,590頭と推定されている。

#### 3.1 O系群

##### 3.1.1 分布と回遊

O系群は、春になると性と成熟状態による棲み分けをしながら、まだ明らかにされていない



図3 . 北太平洋ミンククジラで定められた系群の境界線。A = 日本海-黄海-東シナ海系群 ; B : オホーツク海-西太平洋系群 ; C = その他の系群 (IWC, 1983を改変)。

越冬海域からオホーツク海などの高緯度域にある摂餌域に向けて北上回遊する。O系群の回遊に関する最新の研究は、Hatanaka and Miyashita (1997) によって、商業捕鯨時代とJARPNから得られた捕獲分布と生物データを用いて行われている(図4)。彼らは以下に示すように、性と成熟状態によって回遊パターンが異なることを報告した。

未成熟雄：4月に7海区の沿岸域を回遊し、6月にはオホーツク海南部(11海区)や7海区北部に拡散する。摂餌期が終るまで沿岸域に留まり、その後、越冬域へ移動する。オホーツク海東部や中部、沖合域にはあまり分布しない。

未成熟雌：未成熟雄とほぼ同じパターンを示すが、大型の個体は5月、6月には11海区に比較的多く分布する。

成熟雄：5月から9月にかけて沿岸域と沖合域に広く分布するが、回遊のタイミングと経路に関してはほとんど情報が無い。

成熟雌：5月にはオホーツク海南部に分布し、その後さらに北部へと移動する。7、8、9海区ではあまり見られず、成熟雌の主要な摂餌域はオホーツク海のようなのである。

### 3.1.2 捕鯨

ミンククジラは沿岸の小型捕鯨業の対象種として、図4に示す春季回遊途上の三陸沖(7海区南部)、北海道太平洋沿岸域(7海区北部)、オホーツク海南部(11海区)で捕獲されていた。これらの捕獲は50トン未満の小型の捕鯨船を用いて行われていたが、1987年を最後に商業捕鯨モラトリアムのもとに、操業が停止されている。1994年からはJARPN調査によって科学目的で捕獲がされている。

### 3.1.3 系群構造に関する議論

SCは1991年に行われたミンククジラの包括的資源評価(CA)において、系群構造に関する議論を行った(IWC, 1992b)。その際、SCは従来の系群の定義はCAを行うためには十分ではないことに合意している。1993年の年次会議に先立ち、SCは北西太平洋ミンククジラの

RMP/ISTを開始するための作業部会を開催した。この作業部会では、北西太平洋ミンククジラの回遊パターンや系群構造に関する情報はISTではまだ不十分であるとして、従来の2系群(J系群、O系群)の他に沖合に新たなW系群を仮定し、さらに、J系群とO系群の中にそれぞれ3つと4つの亜系群が存在するという複雑な系群シナリオを提案した。また、作業部会はISTのために最終的に日本の周辺海域を13の海区に分けることに合意した。

これに対して、日本政府は、a) W系群の存在の確認、b) W系群の混合率の推定、c) 亜系群シナリオの実証を3つの柱としたJARPNを開始した。このプログラムは1994年から1999年まで行われ、その期間中に系群構造に関する膨大な量の新しい情報が蓄積された。JARPNで得られた最も有益な情報は、a) 8海区、9海区といった沿岸小型捕鯨でカバーしていない海域から新たにデータを得たこと、b) 事前に設定されたトラックラインに基づき、組織的に標本が採集されたこと、c) 遺伝、非遺伝マーカーを用いて新たに7、8、9海区から採取された標本間の比較が可能になったことである。

1996年に行われた作業部会において、SCはJARPNで得られたデータの一部をレビューした。作業部会は、既報のものも含めて新しいデータは、a) JとO系群が分岐していること、b)

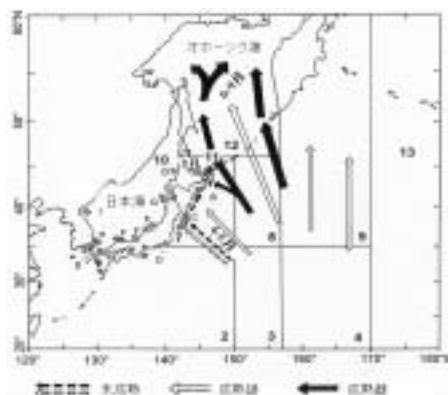


図4 . オホーツク海 - 西太平洋系群の推定される摂餌回遊経路。英字は過去の捕鯨場を示す。(Hatanaka and Miyashita, 1997を改変)。

7、8、9、11、12海区には一系群のみ分布しているという従来のO系群仮説と一致していること(7、11、12海区にたまたまJ個体が現れることはありえる)c)異なる回遊パターンを示す亜系群が存在するという仮説とは合わないことを示すことに合意した。W系群に関しては、作業部会はそれを支持するような証拠がないことに合意したが、何人かのメンバーは、既存のデータは単にWと他の系群の間の遺伝的差異を検出できる能力がないだけであり、W系群の存在は完全に否定できないとした(IWC, 1997)。

続いてSCは、2000年に行われた作業部会でJARPNの総合的なレビューを行った。この作業部会には、全部で32の論文が提出されている。7、8、9海区間の比較は、遺伝的アプローチ(アロザイム、mtDNA、マイクロサテライト)と遺伝以外のアプローチ(生物学的パラメーター、受胎日、外部形態、目視記録、汚染物質、寄生虫)で解析され、議論された。わずかなJ個体の混入はあるものの、基本的にこれら全てのアプローチは、日本の太平洋側には単一系群のみが分布するとの仮説を支持することが示されている。唯一、W系群の存在を示唆したのはmtDNAを用いた解析であり、これは1995年に9海区西側で採取された標本に異質性が見られたことに起因している。したがって、W系群の存在は、ここでも完全には否定されず、作業部会では更なる解析と、特に沖合域における標本採集が勧告されている(IWC, 2001b)。

JARPNレビューの勧告に従い、系群構造に関するいくつかの新しい解析が行われ、2000、2001、2002年のSC会議で報告された。最近の会議では、SCはJARPNより得られたDNAデータを用いた、異なる遺伝解析方法に基づく結果に関する議論が行われた。

新たな標本とそれを用いた解析や系群構造の再考の要求が次々とSCからなされ、このことが北西太平洋ミンククジラISTの遅延の大きな一因となった。これらの議論を踏まえ、2002年、2003年のISTに関する作業部会では、以下のような新しい系群シナリオが提案された：

シナリオA：3系群(J、O、W)仮説。従来の

2系群(JとO)に加えて、9海区の一部海域に第3の系群(W系群)が散発的に出現する(JARPNレビューでの日本人研究者によるmtDNA解析に基づく)。

シナリオB：2系群(JとO)仮説(JARPNレビューに基づく)。

シナリオC：4系群(J、Ow、Oe、W)仮説。Ow、Oe、Wの3系群が東経147度と157度を境に日本の東側に分布する(アメリカ人研究者がBoundary Rank法を用いた解析を基に提唱)。

シナリオD：3系群(J、O、W)仮説。OとWが東経147度と162度の間で段階的に混合している(アメリカ人とオーストラリア人研究者がBoundary Rank法の結果と海洋環境を基に提唱)。

これに対して、2003年のSC会議中に、シナリオCとDを棄却する幾つかの論文が日本側から提出されたが、RMP分科会では、これらの論文の取り扱いを拒まれ、それぞれのシナリオに等しく高い妥当性を与えている(IWC, 2004)。

#### 4. SCにおける系群の定義に関する異なる基準

これまで述べてきたように、系群定義に対して異なる基準がSCにおいて設定されており、以下の点を指摘することができる。

- a) 複数の系群を保全するために設定する最小のユニットの基準について、SCがいくつかの基準をもっていることである。RMPと比較して、AWMP(先住民生存捕鯨)での系群/亜系群に対する議論は、危険性(捕獲に伴う資源量の減少)をさほど重視していなかった。SCは、1993年には北西太平洋ミンククジラのISTを始めるには系群構造におけるデータが足りないことを記しながら、複雑な系群/亜系群シナリオを設定した。一方、B-C-B系群の場合には明確で十分な情報が無いにもかかわらず、SCはデータ不足を補



うための代替シナリオを策定せず、常にB-C-B系群に対して単一系群シナリオを勧告していることである。

b) 北西太平洋ミンククジラに対しては、SCはいろいろな機会に繁殖域での遺伝データの解析を勧告した。SCの何名かの科学者は、そのような情報なしにはミンククジラの系群構造は解明できないということを支持してきた。この勧告は科学的見地からは正しいが、繁殖域が分からない状態で、そのような標本を確保することが非常に困難であることも同時に認めるべきである。

ホッキョククジラB-C-B系群では、複数系群あるいは亜系群が存在する可能性が言及されてきたにもかかわらず（例えば、チュクチ海北部沿岸に沿って春または夏期に回遊するクジラは別の亜系群または系群である可能性がある）、目視記録の季節変化と過去の捕獲記録をもとにSCはこの可能性を棄却してきた。しかし、そのような可能性を明らかにするには、ロシア沿岸で夏を過ごすクジラとバロウ岬を越えてビューフォート海で夏を過ごすクジラとで遺伝解析により比較することが重要である。しかしながら、低緯度海域のミンククジラの場合と同様に標本確保が困難なため、そのような解析はまだ実際には行われていない。

c) 遺伝的あるいは非遺伝的アプローチの比較検討がなければ、バロウ岬を越える際に混合するクジラが複数の系群である可能性を破棄することはできない。

ホッキョククジラは、北上回遊の際に、若齢のクジラが先にバロウ岬を回遊し、次いで成熟個体が通過して行く。しかしながら、複数系群シナリオとは合わないという理由からSCでは単一系群として扱ってきた。

一方、同様な性や年齢による棲み分けは北西太平洋ミンククジラでも起こっており、北上回遊の際に未成熟個体が沿岸域を回遊し、成熟個体は沖合域を回遊している。し

かしながら、これまでのSCではこれが単一系群シナリオを支持するとの考え方は受け入れられていない。

d) 北西太平洋のミンククジラのJ系群個体がO系群の捕獲が行われている海域に移動してきていることがSCでかなりの議論的となっており、ISTではOとJ系群の混合に関する詳しい情報を重視している。ホッキョククジラでも、B-C-B系群とデービス海峡系群が交流している可能性を示す証拠が幾つかあることから、枯渇した系群のクジラがB-C-B系群の捕獲が行われている海域に回遊・分布していた可能性も残されている。

e) SCの何人かのメンバーは、一つの遺伝マーカー（mtDNA）の解析にのみ興味があるようである。JARPN標本のmtDNAデータは常々要求されており、委員会の何人かのメンバーによって使用されている。また、いろいろな解析手法も用いられてきた。しかし、ホッキョククジラB-C-B系群の解析では同様のレベルでの解析には未だ興味を持たれていないし、また解析も行なわれていない。

## 5. 終わりに

SCは、ホッキョククジラにおける「保全単位」をベーリング海中部と西部で越冬し、春には北へ向かう繁殖系群に当てはめている。バロウ岬を越えて回遊するクジラの中にはビューフォート海で、あるいはチュクチ海で夏を過ごす個体がいる。一方、北西太平洋のミンククジラの中には、O系群のみが分布していることを支持する証拠のほうが多い。この場合の「保全単位」は、まだわからない繁殖海域で越冬し、春には高緯度へ回遊する繁殖系群と見なすことができる。回遊の際には、未成熟個体は沿岸、成熟個体は沖合というような性と年齢による棲み分けが起きている。9海区の一部海域にある年にだけW系群の混入があるかもしれないというmtDNA解析の結果のほかには、他系群の存在

を示す遺伝的な証拠は全くない。また、特定の個体が常に同じ摂餌域に回遊しているという証拠もない。

さらに、商業捕鯨はかなり長い期間、沿岸域で行われてきたが、遺伝的多様性が北西太平洋のミンククジラで減少したり消失してしまったといった証拠もない。また、沖合の8海区、9海区に分布するクジラが沿岸の7海区のクジラと同じ系群と示唆されている。

結論として、B-C-B系群を単一系群とSCが見なした基準を北西太平洋ミンククジラにも適用すれば、7、8、9海区にはO系群だけが分布しているのが認められるべきである(ただし、7海区へのJ系群の季節による移動、9海区の一部へのW系群の混入は否定しない)。

以上のように、北西太平洋ミンククジラとB-C-Bホッキョククジラの両ケースは、科学的アプローチが要求するように、一定の基準で平等に考慮されるべきである。

## 6 . 謝 辞

本報の作成にあたってご助言をいただいた役職員の皆様にお礼を申し上げる。また、本報の日本語翻訳にあたり、協力を頂いた研究部・上田真久、後藤睦夫両博士に感謝したい。

## 7 . 引 用 文 献

DeMaster, D., Rugh, D., Rooney, A., Breiwick, J., Shelden, K. and Moore, S. 2000. Review of studies on stock identity of the Bowhead whale from the western arctic. Paper SC/52/SD4 presented to IWC Scientific Committee, May 2000 (unpublished).

Hatanaka, H. and Miyashita, T. 1997. On the feeding migration of the Okhotsk Sea-West Pacific Stock of minke whales, based on length composition data. *Rep. int. Whal.*

*Commn* 47:557-564.

International Whaling Commission. 1983. Report of the Scientific Committee. *Rep. int. Whal. Commn* 33: 43-190.

International Whaling Commission. 1992a. Report of the bowhead whale assessment meeting. *Rep. int. Whal. Commn* 42: 137-155.

International Whaling Commission. 1992b. Report of the Sub-Committee on North Pacific minke whales. *Rep. int. Whal. Commn* 42:156-177.

International Whaling Commission. 1997. Report of the Working Group on North Pacific minke whale trials. *Rep. int. Whal. Commn* 45: 203-226.

International Whaling Commission. 2001a. Report of the Scientific Committee. *J. Cetacean Res. Manage* 1 (Suppl.): 1-374.

International Whaling Commission. 2001b. Report of the workshop to review the Japanese Whale Research Programme under Special Permit for North Pacific minke whales (JARPN). *J. Cetacean Res. Manage.* 3 (Suppl.): 377-413.

International Whaling Commission. 2004. Report of the Scientific Committee. *J. Cetacean Res. Manage.* 6 (in press).

Moore, S. E. and Reeves, R. R. 1993. Distribution and movement. pp. 313-386. In: J. J. Burns, J. J. Montague and C. J. Cowles (eds.). *The bowhead whale*. Society for Marine Mammalogy, Special Publication 2.

Pastene, L. A., Goto, M. and Fujise, Y. 2000. Review of the studies on stock identity in the minke whale *Balaenoptera acutorostrata* from the North Pacific. Paper SC/F2K/J1 presented to IWC Scientific Committee Workshop to review JARPN, February 2000 (unpublished).

## 日本鯨類研究所関連トピックス (2003年12月~2004年2月)

### 水産記者懇談会の開催

1月23日に、共同船舶株式会社、日本捕鯨協会、当研究所の役職員が、水産業界紙各社の記者を当研究所に招いて、会議室で合同の記者懇談会を開催した。大隅当研究所理事長、小川共同船舶社長、中島日本捕鯨協会長が、それぞれ昨年度の事業、今年の実業計画並びに抱負について説明した後、質疑応答がなされた。

### 当研究所評議員会・理事会の開催

1月28日に、当研究所の役員人事に関する評議員会、理事会が開催され、評議員、理事の一部が別表のように交替し、大隅前理事長の顧問就任が承認された。また、翌日開催された共同船舶株式会社の株主総会、取締役会において、当研究所の山村理事が同社の社長に選任された。

### 海外科学者との意見交換会

2月4日から6日まで、ノルウェイ、南アフリカ、アイスランド、韓国から鯨類資源学者を招待して、当研究所会議室において、鯨類資源研究会のメンバーとの間で、IWC科学委員会に関連する諸問題について、意見交換会が開催された。

### 第3回日本伝統捕鯨地域サミット検討会の開催

本年5月30日に高知県室戸市において開催される標記サミットの準備のため、2月6日に当研究所において検討会が開催された。このサミットは、開催地にちなんだテーマの下で学識経

験者による講演とパネルディスカッションを実施し、古くから日本人と鯨の利用が密接な繋がりを持った文化として存在していたことを明らかにすることによって捕鯨及び鯨の利用についての意識を高めることを目的としている。第3回のテーマは、「仮称：近世の捕鯨 日本型捕鯨文化の原型」として、内容の検討を進めている。また、サミットに併せて開催地の鯨とのゆかりを探访する捕鯨史ツアー及び全国や地元或いは現代風の様々な鯨料理を賞味しながら、鯨の利用と文化について語り合う、前夜祭も予定している。このため、現地での検討会など更に準備を進めていくことにしている。

### 国際シンポジウム「海洋生物資源の利用と保護の相互理解に向けて」

2月25日午後、三田共用会議所において外務省及び比較法文化学会主催の標記シンポジウムが開催された。当研究所は水産庁、(社)自然資源保全協会(GGT)とともに本シンポジウムを後援した。林良博東京大学教授(「捕鯨の倫理」)、ロバート・ネルソン米国メリーランド大学教授(「西洋における環境保護の宗教的根源」)、森田勝昭甲南女子大学教授(「日本列島の捕鯨近代化にともなう文化変容と伝統」)、ジェレミー・プリストウ英国BBCプロデューサー(「日本の捕鯨を理解する：外国人ジャーナリストの視点」)がそれぞれ講演を行い、引き続き金子与志男GGT企画部長の司会により、参加者(123名)も交えたパネル討論が行われた。当研究所から村上専務理事以下、役職員7名が参加した。

## ( 1 ) 理事の交替

前理事			新理事		
理事長	大隅清治	辞任 (1/28)	理事長 (1/29)	畑中寛	(独)水産総合研究センター 理事長
専務理事	村上光由	継続			
(常勤)理事	山村和夫	辞任 (1/28)	(常勤)理事 (1/30)	服部則宣	共同船舶株式会社取締役
(非常勤)理事	小川洋	辞任 (1/28)	(非常勤)理事 (1/29)	山村和夫	(財)日本鯨類研究所常勤理事
(非常勤)理事	高橋順一	継続			
(非常勤)理事	高山武弘	継続			
(非常勤)理事	林良博	継続			
(非常勤)理事	星合孝男	継続			
(非常勤)理事	馬見塚達雄	継続			
(非常勤)理事	吉崎清	継続			
(非常勤)監事	嶋建男	継続			

## ( 2 ) 評議員の交替

前評議員			新評議員		
伊藤裕康	中央魚類	継続			
垣添直也	日本水産	継続			
小松錬平	元朝日新聞	継続			
島一雄	海外まき網	継続			
中島圭一	捕鯨協会	継続			
畑中寛	中央水研	辞任 (1/28)	若林清 (1/29)	(独)水産総合研究センター遠洋水産 研究所所長	
藤井浩	大洋A&F	継続			
山内静夫	漁船保険中央会	継続			
弓削志郎	増殖推進部長	辞任 (1/28)	中前明 (1/29)	増殖推進部長	
米澤邦男	GGT	継続			

## 日本鯨類研究所関連出版物等 (2003年12月~2004年2月)

## 【印刷物】

畑中 寛：“鯨研究”に全力投球 まずJARPA 調査計画策定を．みなと新聞，2004/2/18.

畑中 寛：（インタビュー 捕鯨グループが新体制に）持続的捕鯨が地球・人類の未来開く （財）  
日本鯨類研究所畑中寛理事長．水産タイムス，2004/2/23.

畑中 寛：（新トップ対談 今後の捕鯨 今後の研究）研究者と深い信頼関係を確立 畑中理事長．

第421号 2004年3月

日刊水産経済新聞, 2004/2/24.

Hayashi, K., Nishida, S., Yoshida, H., Goto, M., Pastene, L.A., Koike, H. : Sequence variation of the *DQB* allele in the cetacean MHC. *Mammal Study* 28 : 89-96, 2003.

Ikemoto, T., Kunito, T., Watanabe, I., Yasunaga, G., Baba, N., Miyazaki, N., Petrov, E.A., Tanabe, S. : Comparison of trace element accumulation in Baikal seals (*Pusa sibirica*), Caspian seals (*Pusa caspica*) and northern fur seals (*Callorhinus ursinus*). *Environmental Pollution* 127 : 83-97, 2004.

石川 創 : 鯨の捕獲調査は非人道的行為か? 鯨研通信 420 : 1-6, 2003/12.

小西健志 (共著) : フィールドの寄生虫学. 354pp. 東海大学出版会, 2004/1/20.

小西健志 (共著) : 海のけもの達の物語. 172pp. 成山堂書店, 2004/2/8.

大木阪京魚 : クジラ研究の「トキワ荘」時代. 鯨研通信 420 : 6-16, 2003/12.

大曲佳世 : 鯨類資源の利用と管理をめぐる国際的対立. 国立民族学博物館調査報告46(岸上伸啓編 海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究)419-452 国立民族学博物館, 2003/12/26.

Ohmagari, K. : The Role of Traditional Food in Identity Development among the Western James Bay Cree. *Senri Ethnological Studies* 66 : 127-138, 2004/2/20.

大隅清治 : 沿岸域でのクジラ・イルカ類の生態調査法(第6編第4章). 地球環境調査計測事典 第3巻沿岸域編 : 743-747 フジ・テクノシステム, 2003/11/27.

大隅清治 : 暮らしの情報 網走の活き粋き7珍「ツチクジラ」. 広報あばしり : 16, 2004/1.

大隅清治 : (座談会) IWC過半数まであと一歩捕鯨飛躍の年に 新春くじら座談会. 水産タイムス, 2004/1/1.

大隅清治 : 年頭会見 商業捕鯨再開に向け飛躍の年 例年以上にイベント多彩. 日刊水産経済新聞, 2004/1/27.

#### 【学会発表】

川原重幸・村瀬弘人 : 鯨類調査、研究における海洋版GISの活用(北太平洋) (口頭発表). 東京大学海洋研究所共同利用シンポジウム 「海洋GISと空間解析 - そのサイエンスと未来 - 」東京大学海洋研究所, 2003/12/11-12.

村瀬弘人・松岡耕二 : 鯨類調査・研究における海洋GISの活用-フィールドから解析まで-(南極海編) (口頭発表). 東京大学海洋研究所共同利用シンポジウム 「海洋GISと空間解析 - そのサイエンスと未来 - 」東京大学海洋研究所, 2003/12/11-12.

島田裕之・村瀬弘人 : 南極海におけるクロミンククジラ分布パターンと海水状態の関係 (ポスター発表). 第26回極域生物シンポジウム 国立極地研究所, 2003/12/4-5.

#### 【放送・講演】

大隅清治 : WHALE HUNTERS. BBC 4TV, 2002/5/27.

田村 力 : クジラ博士の出張授業. 京都府平盛小学校, 2004/2/24.

#### 【新聞記事】

・5月室戸市で捕鯨サミット 日鯨研が主催 : 水産タイムス, 2003/12/15.

・持続的捕鯨の再開を現実に 鯨研・大隅理事長らが年頭会見 : 日刊水産通信, 2004/1/27.

・持続捕鯨に世界的理解を 南極海捕鯨100周年事業も 鯨関係3者合同会見 : みなと新聞, 2004/1/27.

・鯨研理事長に畑中寛氏 共同船舶は新社長に山村和夫氏 : 日刊水産通信, 2004/1/30.

- ・ひと 捕鯨との関わり京都會議から (財)日本鯨類研究所理事長に就任した畑中寛氏：みなと新聞，2004/2/2.
- ・捕鯨、鯨食文化に理解を 4月に函館で捕鯨船団一般公開：みなと新聞，2004/2/18.
- ・遺伝子からみても日本人に合った肉 消費者ら500人が参加 鯨と食文化を語る市民の夕べ：日刊水産経済新聞，2004/2/19.
- ・捕鯨文化に正しい理解を 外務省・比較法文化学会が国際シンポ：日刊水産通信，2004/2/27.

#### 【雑誌記事】

- ・2003年度JARPN 鯨の食性の多様性明らかに：勇魚通信，2003/12.
- ・南氷洋鯨類捕獲調査船団、そろって下関を出港：勇魚通信，2003/12.
- ・鯨類捕獲調査の副産物販売 日本鯨類研究所：水産週報，2003/12/15-25.
- ・図書館・資料館を訪ねる (財)日本鯨類研究所図書室：ASANO LIBRARY，2003/12/15.
- ・本の紹介「クジラと日本人」大隅清治著：季刊 日本人とさかな，2004/1.
- ・第十次北西太平洋鯨類調査副産物の販売 販売数量は1,346.2トンで価格は昨年同様 日本鯨類研究所：水産世界，2004/1.

## 京きな魚（編集後記）

今年最初の「鯨研通信」をお送りする。今年もご愛読とご叱正をお願いします。

さて、本号の「トピックス」でお知らせしているように、去る1月28日に開催された当研究所の評議員会・理事会において、役員の一部の交替が承認された。そして、当研究所がかねてから希望していた、独立行政法人・水産総合研究センター理事長の畑中寛さんが当研究所の理事長として就任するとともに、共同船舶株式会社の服部則宣取締役を常勤理事としてお迎えした。本号に新理事長の力強いご抱負を披瀝して下さったので、ぜひお読み下さり、当研究所の将来像をご理解頂きたい。

本号のもうひとつの読み物は、当研究所のバステネ研究部長によるIWC科学委員会関連の解説文である。彼は優れた鯨類遺伝研究者であり、その研究能力とIWC科学委員会への貢献が評価されて、最近では「系統」分科会の議長を務めている。長年にわたるIWC科学委員会での議論への参加の経験から、彼はIWCの科学委員会の論議と決定は決して公平ではなく、系群の取り扱いにおいても、二重基準が罷り通っていることを、2つの実例をもって具体的に示している。

前述の当研究所の評議員会・理事会の翌日に開催された、共同船舶株式会社の株主総会と取締役会において、当研究所の山村和夫理事長が社長に就任した。共同船舶株式会社と当研究所とは、鯨類捕獲調査の推進において“車の両輪”のような密接な関係にある。当研究所の創立当初から研究所の発展のために最大の力を尽くしてきた山村さんが、これからは共同船舶株式会社で采配を振るうことになるのは、頼もしい限りである。服部さんの理事の就任とともに、両組織の結束が益々強化されることになる。

この一連の人事交替に関連して、小生も顧問として当研究所に引き続き勤めさせて頂いている。そして、本誌の編集責任者の役が、山村さんから小生にバトンタッチされた。本誌は当研究所と賛助会員とを繋ぐパイプの役目を果たしていると考え。これからはさらにパイプを太くして、鮮度のよい情報がより多く会員に流れるように努めたい。それには、会員の皆様の忌憚のない声を沢山に聞かせて頂くことが大切であると痛感している。手紙なり、電話なりの通信手段で、事務局の清家さんや小生にご遠慮なくご連絡をお願いします。（大隅清治）

ストランディングレコード (2003年12月~2004年2月受付)

登録番号	和名	詳細	雌雄	都道府	位置	西暦年月	状況	生死	体長	生物情報	報告者	所属	情報源	標本	備考
P-199	コウマツナ	B	1	北海道	威楽郡えりも町えりも岬	20030400	漂着	生存→飼育→放流		生後約1ヶ月	茂越敏弘	日本鯨類研究所	毎日新聞(031206web)	後肢に識別タグ	広尾海洋水族科学館で保護(川比)りの後031205えりも岬に放流。愛知の、愛知海洋水族科学館で保護(川比)りの後031205えりも岬に放流。
P-200	コウマツナ	B	1	北海道	新冠郡新冠町	20030500	漂着	生存→飼育→放流		生後約1ヶ月	茂越敏弘	日本鯨類研究所	毎日新聞(031206web)	後肢に識別タグ	広尾海洋水族科学館で保護(川比)りの後031205えりも岬に放流。
0-1519	オカリ	B	1	愛知	渥美郡渥美町西ノ浜(伊勢湾/三河湾)	20030720	漂着	死亡	1.85		中村みつ子	志摩半島野生動物研究会	若林和夫(志摩半島野生動物研究会)様由		
0-1520	オカリ	B	1	愛知	渥美郡渥美町西ノ浜(伊勢湾/三河湾)	20030730	漂着	死亡	1.66		中村みつ子	志摩半島野生動物研究会	若林和夫(志摩半島野生動物研究会)様由		
0-1521	オカリ	A	1	愛知	渥美郡渥美町西ノ浜(伊勢湾/三河湾)	20031021	漂着	死亡	1.53		中村みつ子	志摩半島野生動物研究会	若林和夫(志摩半島野生動物研究会)様由		
0-1522	オカリ	A	1	愛知	渥美郡渥美町西ノ浜(伊勢湾/三河湾)	20031031	漂着	死亡	1.35		浜田益男	志摩半島野生動物研究会	若林和夫(志摩半島野生動物研究会)様由		
0-1510	アサギ	A	1	茨城	那珂郡東海村村松新田河口	20031121	漂着	死亡	3.40	詳細計測値有り。	菅川智子	7777-ト茨城県大洗水族館			14:30発見。日新研でDNA検査(後藤隆夫)。理却。他報告者:村瀬弘人・茂越敏弘(日新研)。共同調査ユ-2031227。
M-544f	ミンクガウ	A	1	北海道	紋別郡興部町地先	20031124	混獲(竹定)	死亡	4.70		横内武久	沙留漁業協同組合		DNA標本(日新研)	7:20AM発見。省令に基づき販売。ICRY-03-107
M-545f	ミンクガウ	A	1	宮城	牡鹿郡牡鹿町金山	20031127	混獲(定置網)	死亡	5.30		兒玉信夫	牡鹿漁業協同組合		DNA標本(日新研)	6:00AM発見。省令に基づき販売。ICRY-03-109
M-546f	ミンクガウ	A	1	北海道	紋別郡雄武町沢木地先	20031129	混獲(竹定)	死亡	5.10		高橋信一	雄武漁業協同組合		DNA標本(日新研)	省令に基づき販売。ICRY-03-110
M-543	ミンクガウ	B	1	富山	高岡市松太枝浜(富山湾)	20031202	漂着	死亡	5.15	腐敗。	南野久男	富山科学文化センター		頭骨他一部骨格(科学文化センター)無し	富山科学文化センターが調査。031203解体解剖処分。
0-1508	アザヒ	A	1	北海道	登別市大和町1	20031202	漂着	死亡	1.86	胸周112.8cm	木下藤子	室蘭工科大学研究開発出張所			
M-547f	ザトウクマ	A	1	北海道	茅部郡茅部町	20031202	混獲(大型定置網)	生存→死亡	9.00		張島勝			DNA標本(日新研)	6:00AM発見。省令に基づき販売。ICRY-03-111
0-1509	オカリ	B	1	大阪	泉大津市	20031203	港内迷入	生存			村瀬弘人	日本鯨類研究所	Yahooユ-2031203		網外へ出そうとするが死亡。省令に基づき販売。ICRY-03-112
M-548f	ミンクガウ	A	1	宮崎	延岡市赤水町沖	20031205	混獲(大型定置網)	生存→死亡	5.00		日野政和	延岡市漁業協同組合		DNA標本(日新研)	6:30AM発見。省令に基づき販売。ICRY-03-113
M-549f	ミンクガウ	A	1	新潟	西蒲区大字雄泊(両津湾)(佐渡島)	20031205	混獲(大型定置網)	死亡	4.03		山口栄	藤栄水産		DNA標本(日新研)	
M-550f	ミンクガウ	A	1	神奈川県	茅ヶ崎市地先(相模湾)	20031205	混獲(大型定置網)	生存→死亡	5.30		磯崎晴一			DNA標本(日新研)	4:00AM発見。網外へ出そうとするが死亡。省令に基づき販売。ICRY-03-114
M-551f	ミンクガウ	A	1	高知	室戸市羽根町二又漁場(土佐湾)	20031205	混獲(7号定置網)	死亡	5.20		林竹松	羽根町漁業協同組合		DNA標本(日新研)	省令に基づき販売。ICRY-03-115
M-554f	ミンクガウ	A	1	北海道	茅部郡茅部町字白尻地先	20031211	混獲(大型定置網)	生存→死亡	4.50		野村謙			DNA標本(日新研)	5:30AM発見。省令に基づき販売。ICRY-03-116

登録番号	和名	群	産地	都道府	位置	西暦年月	状況	生死	体長	生物情報	報告者	所属	情報源	標本	備考	
M-555f	シカクマ	A	1	和歌山	東牟婁郡太地町 地先	20031212	混獲(大型) 定置網	死亡	7.35		東忠生	太地水産共 同組合		DNA標本(白鯧研)	省令に基づき販売。ICRY-03-117	
M-556f	シカクマ	A	1	長崎	上県郡上里町大 字伊奈(利馬海 岬)	20031216	混獲(大型) 定置網	生存→死亡	3.93	衰弱。	丸島大作	伊奈漁業協 同組合		DNA標本(白鯧研)	省令に基づき販売。ICRY-03-118	
0-151f	シカクマ	B	1	三重	度会郡二見町西 浦庄(伊勢湾)	20031217	漂着	死亡	1.81	皮膚剥離、 腐敗顕著。	古田正美	鳥羽水族館	二見シカクマイ シ		二見シカクマイ、二見町役場が調査。	
M-557f	シカクマ	A	1	岩手	大船渡市三陸町 綾里地先	20031218	混獲(中型) 少定置網	生存→死亡	4.10		佐々木昭夫	綾里漁業協 同組合		DNA標本(白鯧研)	網外へ出そうとするが死亡。省令に基 づき販売。ICRY-03-119	
M-558f	シカクマ	A	1	高知	土佐清水市足摺 岬岬ヶ鼻沖	20031218	混獲(定置 網)	生存→死亡	5.40		山下幸利	伊佐共同大 数組合		DNA標本(白鯧研)	省令に基づき販売。ICRY-03-120	
M-560f	シカクマ	A	1	三重	尾鷲市早田町地 先	20031219	混獲(大型) 定置網	生存→死亡	7.50	滅死。	岩本林	尾田漁業協 同組合		DNA標本(白鯧研)	省令に基づき販売。ICRY-03-122	
M-552	シカクマ	B	1	鹿児島	川辺郡大浦町小 湊十和地	20031221	漂着	死亡	4.80	腹部膨満、 腐敗。	大畑和代	笠沙恵比寿		胃内容物(笠沙恵 比寿)	031222笠沙恵比寿、かこしま水族館、鹿 兒島大学が調査。理却。ICRY- 03-121	
M-559f	シカクマ	A	1	新潟	阿津市大字白瀬 地先(佐渡島)	20031221	混獲(大型) 定置網	死亡	5.20		坂野久一	加茂水産定 置網組合		DNA標本(白鯧研)	省令に基づき販売。ICRY- 03-121	
M-562f	シカクマ	A	1	高知	土佐清水市市布 利三ツ巻沖(土佐 湾)	20031222	混獲(大型) 定置網	生存→死亡	6.10		阿村正三	以布利共同 大数組合		DNA標本(白鯧研)	地元配布の他、省令に基づき販売。ICRY -03-124。	
0-1513	シカクマ	A	1	茨城	東茨城郡大洗町 大洗沖300m	20031223	混獲(少シ 網)	生存→死亡	1.75	脱上で死 亡。	皆川智子	7779-11*茨 城県大洗水 産館			胃腸・心・肝・肺・ 脾・胆臓・膀胱・生 殖器(7779-11*十 寒人)、骨格(777- 11*)、脂皮(海洋水 研)	07:00AM混獲、13:00大洗水族館で剖検。
M-561f	シカクマ	A	1	京都	舞鶴市字田井(若 狭湾)	20031223	混獲(大型) 定置網	死亡	5.00		水上隆夫	田井漁業協 同組合		DNA標本(白鯧研)	省令に基づき販売。ICRY-03-123	
M-568f	シカクマ	A	1	三重	尾鷲市九虎町地 先	20031224	混獲(大型) 定置網	生存→死亡	5.00	滅死。	川上岩正	九尾定置漁 業		DNA標本(白鯧研)	報告ではシカクマ。省令に基づき販売。 ICRY-03-130	
M-563f	シカクマ	A	1	岩手	新釜(瓦置漁場)	20031225	混獲(定置 網)	生存→死亡	3.70		阿部全一	大浦漁業協 同組合		DNA標本(白鯧研)	6:00AM発見。省令に基づき販売。ICRY- 03-125	
M-564f	シカクマ	A	1	岩手	大船渡市三陸町 綾里地先	20031226	混獲(中型) 少定置網	生存→死亡	6.30		佐々木昭夫	綾里漁業協 同組合		DNA標本(白鯧研)	網外へ出そうとするが死亡。省令に基 づき販売。ICRY-03-126	
M-565f	シカクマ	A	1	和歌山	橋本郡都賀町 浦町大字字久井 沖	20031227	混獲(大型) 定置網	死亡	6.30		亀井隆弘	字久井漁業 協同組合		DNA標本(白鯧研)	7:00AM発見。省令に基づき販売。ICRY- 03-127	
0-1512	シカクマ	B	1	千葉	安房郡白浜町野 島崎灯台西	20031229	漂着	死亡	14.00		藤田健一郎	6DORSALS KA YAK SERVICE S			町が根本海岸まで曳航して理却。報告 者・東京中央博物館海の博物館・国立 科学・八景島シカクマイらが調査。他報 告者：萩野みちる(海の哺乳類情報社) -)、茂越敏弘(日報研)。毎日/発売03123 0。	
M-566f	シカクマ	A	1	宮城	牡鹿郡牡鹿町金 華山嶺形	20031229	混獲(定置 網)	死亡	3.90		児玉信夫	牡鹿漁業協 同組合		DNA標本(白鯧研)	6:30AM発見。省令に基づき販売。ICRY- 03-128	
M-567f	シカクマ	A	1	石川	鳳至郡能登町波 並地先	20031230	混獲(大型) 定置網	生存→死亡	4.60		山本弥兵	波並大数網 組合		DNA標本(白鯧研)	6:00AM発見。省令に基づき販売。ICRY- 03-129	
0-1514	シカクマ	A	1	長崎	豊後郡都井郡町 三級郷石浜(大 村湾)	20040101	漂着	死亡	1.10	腐敗顕著。	千々布義昭	長崎県自然 保護課	第一報告者: 山口啓介(西 海)・杉ノセ夕 一)		町が調査後理却。	
M-569f	シカクマ	A	1	和歌山	東牟婁郡太地町 地先	20040102	混獲(大型) 定置網	死亡	5.10		東忠生	太地水産共 同組合		DNA標本(白鯧研)	省令に基づき販売。ICRY-04-001	
M-571f	シカクマ	A	1	富山	水原市宇波沖(富 山湾)	20040104	混獲(少シ 少定置 網)	生存→死亡	4.00		濱元英一	瀬浦定置漁 業組合		DNA標本(白鯧研)	6:00AM発見。省令に基づき販売。ICRY- 04-003	
M-570f	シカクマ	A	1	富山	新湊市堤内沖1.5 km(富山湾)	20040105	混獲(少シ 定置網)	死亡	5.50		堤昌昌之	新湊漁業		DNA標本(白鯧研)	3:30AM発見。省令に基づき販売。ICRY- 04-002	



登録番号	和名	評 価	種 別	都道府 市 町 村	位置	西暦年月	状況	生/死	体長	生物情報	報告者	所 属	情報源	標 本	備 考
M-572f	ミヅカサウ	A	1	三重	志摩郡片田妻崎 沖	20040105	混獲(定置 網)	生存→死亡	4.10		山本輝人	志摩の白魚 業防同組合	DNA標本(日鯨研)		6:00AM発見。省令に基づき販売。ICRY-04-004
M-573f	ミヅカサウ	A	1	富山	水見市水見沖(富 山湾)	20040107	混獲(定置 網)	生存→死亡	6.50		森本太郎	水見四共漁 業組合	DNA標本(日鯨研)		5:00AM発見。省令に基づき販売。ICRY-04-005
M-574f	ミヅカサウ	A	1	石川	鹿至郡能都町波 笠船先	20040107	混獲(大型 定置網)	生存→死亡	5.40		山本弥兵	海並大鯨網 組合	DNA標本(日鯨研)		6:00AM発見。省令に基づき販売。ICRY-04-006
M-576f	ミヅカサウ	A	1	長崎	下県郡美津島町 大字鴨居瀬(対馬 海峡)	20040109	混獲(落し 網)	死亡	6.20		岡山博光	岡山水産	DNA標本(日鯨研)		10:00AM発見。地元配布の地。省令に基づき販売。ICRY-04-008
M-578f	ミヅカサウ	A	1	京都	与謝郡伊根町彌 崎沖(若狭湾)	20040109	混獲(大型 定置網)	生存→死亡	7.00		吉田巨	伊根漁業	DNA標本(日鯨研)		9:00AM発見。省令に基づき販売。ICRY-04-010
P-201	ワシカサウ	B	1	岩手	上閉伊郡大槌町 吉里吉里漁港	20040109	港内迷入	生存→飼育	1.02	左腕上部に 裂傷、出血 あり。	天野雅男/神 宮潤一	東大海洋研 究所 国際漁漁サ ワシカサウ 鳥水産館	複製(右手印標)、 臓器(松島水族館)		9:00AM発見。標を負っているため県、 町、漁協、海洋研らが協議し松島水族館 に保護申請。18:00捕獲。22:00保護收容 し治療するが040117早朝に急死。 漁師らが發射を試みるが衰弱のため鳴 川ワシカサウが保護。
O-1515	北ノコトウ	B	1	千葉	勝浦市守谷海岸	20040110	漂着	生存→飼育	2.50		村瀬弘人	日本鯨類研 究所	朝日新聞(040 112web)		5:30AM発見。省令に基づき販売。ICRY-04-007
M-575f	ミヅカサウ	A	1	富山	水見市宇波沖(富 山湾)	20040110	混獲(定置 網)	生存→死亡	5.30		清元英一	瀬清定置漁 業組合	DNA標本(日鯨研)		7:35AM発見。今治漁海上保安部、町職 員らが救助活動を行い尾鰭に0-27を少 量で魚船で沖に曳航。9:30AM放流。他報 告者：致野みちる(海の哺乳類情報サ ワシカサウ)、和厚村瀬弘人、後藤達夫(日鯨 研)。販売/産後新聞/共同通信ニュース速報 (040112)。
M-553	ニシカサウ	A	1	愛媛	秘習郡大西町九 王海岸	20040112	漂着	生存→放流	7.30	衰弱。	梅垣榮一郎		朝日新聞(040 113)		7:00AM発見。省令に基づき販売。ICRY-04-009
M-577f	ミヅカサウ	A	1	長崎	北松浦郡生月町 船瀬沖	20040113	混獲(大型 定置網)	死亡	3.50		金子源吉	船浦漁業協 同組合	DNA標本(日鯨研)		7:30AM発見。揚網中に死亡。省令に基づき販売。ICRY-04-011
M-579f	ミヅカサウ	A	1	石川	七尾市佐々波町 地先(富山湾)	20040116	混獲(定置 網)	生存→死亡	6.50		勝本吉司	佐々波鯨網	DNA標本(日鯨研)		5:00AM発見。省令に基づき販売。ICRY-04-013
M-581f	ミヅカサウ	A	1	石川	鳳至郡能都町宇 小浦地先	20040116	混獲(大型 定置網)	生存→死亡	4.40		坂口藤雄	小浦羽根大 鯨網組合	DNA標本(日鯨研)		9:00AM発見。省令に基づき販売。ICRY-04-012
M-580f	ミヅカサウ	A	1	長崎	下県郡美津島町 鴨居瀬黒島水垂 地先(対馬海峡)	20040118	混獲(定置 網)	死亡	2.80		齊藤強				040119調査後埋却。
O-1516	ワシカサウ	B	1	愛知	海美郡海美町西 ノ浜(伊勢湾/三 河湾)	20040118	漂着	死亡	1.31	体色黒化。 詳細計測値 有り。	川田伸一郎	名古屋大学 大学院		全身骨格(解剖学 院大)、肝、腎、脂 肪、筋(名古屋大 学)	
M-583f	ミヅカサウ	A	1	熊本	天草郡天草町大 江地先	20040121	混獲(大型 定置網)	生存→死亡	3.10		清藤昭	あまくさ漁 業防同組合	DNA標本(日鯨研)		6:30AM発見。省令に基づき販売。ICRY-04-014
EX-087	サシカサウ	A	1	大分	大分市神崎沖(別 府湾)	20040122	目混情報	生存		体長約10m	蛭田密	AQUATIC ANI MAL CONSULT ING		040129別府湾内漂在中。他報告者：吉 岡基(三重大)、坂野みちる(海の哺乳類 情報サワシカサウ)、朝日新聞、共同通信ニュース速 報/大分合同新聞社web040130	
M-584f	ミヅカサウ	A	1	鳥取	八束郡美保町 美保町地先	20040122	混獲(定置 網)	死亡	4.97		舩谷茂	美保町大鯨 網組合	DNA標本(日鯨研)		7:10AM発見。省令に基づき販売。ICRY-04-015。種経歴は推定 調査後埋却。
O-1517	ワシカサウ	A	1	愛知	知多郡美浜町北 成田海岸(伊勢 湾)	20040127	漂着	死亡	1.21	腐敗顕著。	大池広也、飯 田結里絵、添 田真希子、中 田美鈴	南知多ワシ カサウ		第一発見者； 中野清孝	
M-585f	ミヅカサウ	A	1	富山	水見市宇波沖(富 山湾)	20040128	混獲(ワシ カサウ定置 網)	生存→死亡	3.70		清元英一	瀬清定置漁 業組合	DNA標本(日鯨研)		6:00AM発見。省令に基づき販売。ICRY-04-016
M-587f	ミヅカサウ	A	1	石川	鳳至郡六水町宇 前波沖	20040128	混獲(大型 定置網)	生存→死亡	3.00		梅本安幸	前波大鯨網	DNA標本(日鯨研)		省令に基づき販売。ICRY-04-018
M-586f	ミヅカサウ	A	1	長崎	下県郡美津島町 黒島地先(対馬海 峡)	20040130	混獲(定置 網)	生存→死亡	3.50		山元雄太		DNA標本(日鯨研)		7:50AM発見。省令に基づき販売。ICRY-04-017

登録番号	和名	群	雄	雌	都道府	位置	西暦年月	状況	生死	体長	生物情報	報告者	所属	情報源	標本	備考
M-588f	ミヅカツウ	A	1		富山	水見市水見沖(富山湾)	20040131	混獲(小定置網)	生存→死亡	4.80		森本太郎	水見四共漁業組合		DNA標本(日録研)	5:30AM発見。省令に基づき販売。ICRY-04-019
M-589f	サトカツウ	A	1		鹿児島	川辺郡笠沙町崎ノ山地先	20040131	混獲(小型定置網)	生存→死亡	8.20	衰弱	中尾雄作	丸世大吉漁業生産組合		DNA標本(日録研)	10:30AM発見。省令に基づき販売。ICRY-04-020
M-590f	ミヅカツウ	A	1		富山	水見市宇波沖(富山湾)	20040201	混獲(7'小定置網)	生存→死亡	5.15		清元英一	瀬浦定置漁業組合		DNA標本(日録研)	10:30AM発見。省令に基づき販売。ICRY-04-021
O-1518	アザリ	A	1	1	豊和	知多郡南知多町山海海岸(伊勢湾)	20040202	漂着	死亡	1.31	腐敗顯著	大池成也・竹森聖美・徳木綾子	南知多ビーチリゾート			調査後埋却。
M-591f	ミヅカツウ	A	1	1	佐賀	鹿潭市神楽島(那珂川)	20040206	混獲(定置網)	生存→死亡	5.50	衰弱	前田峰一	黒瀬村張大漁業協同組合		DNA標本(日録研)	4:00AM発見。省令に基づき販売。ICRY-04-022
M-592f	ミヅカツウ	A	1		鹿児島	川辺郡笠沙町高崎山地先	20040206	混獲(大型定置網)	死亡	3.10		中尾雄作	笠沙町漁業協同組合		DNA標本(日録研)	10:30AM発見。省令に基づき販売。ICRY-04-023
M-593f	ミヅカツウ	A	1		鹿児島	川辺郡笠沙町野間池地先	20040208	混獲(小型定置網)	死亡	2.70		宮内叶			DNA標本(日録研)	8:00AM発見。省令に基づき販売。ICRY-04-024
M-594f	ミヅカツウ	A	1		長崎	平池地先	20040209	混獲(小型定置網)	生存→死亡	5.40		緑香良一	緑香水産		DNA標本(日録研)	10:00AM発見。網外へ出そうとするが死亡。省令に基づき販売。ICRY-04-025
M-595f	ミヅカツウ	A	1		鹿児島	肝属郡内之浦町(鹿児島県)	20040210	混獲(定置網)	死亡	6.20		小重文治	内之浦町漁業協同組合		DNA標本(日録研)	省令に基づき販売。ICRY-04-026
M-596f	ミヅカツウ	A	1	1	富山	水見市水見沖(富山湾)	20040212	混獲(7'小定置網)	生存→死亡	5.00		森本太郎	水見四共漁業組合		DNA標本(日録研)	5:00AM発見。省令に基づき販売。ICRY-04-027
M-597f	サトカツウ	A	1		長崎	南松浦郡有川町(五島列島)	20040213	混獲(大型定置網)	生存→死亡	8.20	衰弱	立石仁平	有川町漁業協同組合		DNA標本(日録研)	12:30発見。落網の人口で尾端が0.7に絡まっていた。省令に基づき販売。ICRY-04-028
M-598f	ミヅカツウ	A	1		高知	土佐清水市足摺岬ヶ瀬沖	20040213	混獲(定置網)	死亡	7.40		山下幸利	伊安共同大船組合		DNA標本(日録研)	9:00AM発見。省令に基づき販売。ICRY-04-029
M-582	ミヅカツウ	A	1		神奈川県	足柄下郡真鶴町(相模湾)	20040217	混獲(大型定置網)	死亡	5.00		青木勝海	岩漁業協同組合		DNA標本(日録研)	8:30AM発見。省令に基づき販売。ICRY-04-030。他報告者；岩同基(三重人)・牧野みちる(海の哺乳類情報センター)。共同通信ニュース速報040217
M-599f	ミヅカツウ	A	1	1	富山	水見市(富山湾)	20040219	混獲(定置網)	生存→死亡	3.80		清元英一	瀬浦定置漁業組合		DNA標本(日録研)	5:00AM発見。省令に基づき販売。ICRY-04-031
M-600f	ミヅカツウ	A	1		石川	鳳至郡能登町小浜地先	20040219	混獲(定置網)	生存→死亡	5.10		中弘	中漁業部		DNA標本(日録研)	6:00AM発見。省令に基づき販売。ICRY-04-032
M-601f	ミヅカツウ	A	1		長崎	北松浦郡生月町	20040224	混獲(大型定置網)	死亡	3.50		金子源吉	館浦漁業協同組合		DNA標本(日録研)	7:00AM発見。省令に基づき販売。ICRY-04-033
M-602	ミヅカツウ	A	1		宮城	気仙沼市大島小前見島沖	20040226	混獲(釣籠)	死亡	4.80		鈴木昇	気仙沼市		DNA標本(日録研)	7:00AM工籠の0.7に絡まっていた箇所を発見。市が一般廃棄物処分場に埋却。

\*表中の「群」は鯨種判定の信頼性を区分しており、Aは日録研職員が調査や写真等によって鯨種を鑑別した場合、Bは他の研究者の方が鯨種を鑑別した場合、Cは鯨種の判定はされなくても判定者が不明で判定に疑問がある場合、判定が確定による所が多い場合を示しています。また「雄」「雌」各欄は、黒澤隆哉のウチノ雄雄が判別した鯨のみを記入してあります。「体長」はmを記述してあります。記録番号の頭文字の“O”はハクジラ、“M”はヒメクジラ、“P”は髯鯨(アシカ、アザリ等)を示します。“E”“X”はストラランディングの分類(鯨研通信387)にはあてはまらないもの、希少種の目撃や珍しい事例について寄せられた情報を紹介しています。  
 \*(財)日本鯨類研究所では、日本沿岸に漂着、迷入、混獲した鯨類の情報(オナガクジラ・ロスト)の収集、記録を行っております。ストラランディングを発見したり、新聞記事などの情報がございましたら、ぜひ日本鯨類研究所までご連絡ください。よろしくお願いいたします。